

不安を捨てよ、ただ希望せよ

上 廣 榮 治

三月、卒業式のシーズンです。この頃になると、卒業式を終えたばかりの、着物に袴姿の女学生たちが、本部会館の前の坂道を下って行くのをよく見かけます。最近では、難しい理屈をこねあけて「仰げば尊し」も歌わないという学校も少なくないそうですが、卒業式が深い喜びと感傷の交錯する場であることは、昔も今も変わらないでしょう。

手元の歳時記を引いてみると、「一を知って二を知らぬなり卒業す 虚子」とありました。高浜虚子の俳句です。これまでに学んだことへの自信と喜び、そして、まだ知らないことへの「希望と不安」が重なった生徒たちの感慨が伝わってきます。

卒業式だけではありません。この時期に集中する進学や進級も、あるいは職場の異動や転勤もみな、希望と不安が交錯することでは同じです。

そんな人生の岐路に立った人たちに、申し上げたいことが一つあります。「不安は捨てなさい。ただ希望だけに胸を膨らませなさい」と。

私自身の経験や、これまで接してきたすべての人たちの場合、不安を希望に先立てて、よかった事例はただの一つもないからです。不安は何事も生み出さず、希望こそがすべての源だからです。

「不安」とは、これから起こるかもしれない漠然とした危機の予感です。何が原因なのか定かでないのが特徴です。これに対して、「恐れ」はその対象や原因がはっきりしています。そのため、ただちに対策を立てることも可能です。

例えば、地球温暖化への恐れであれば、その解決策は二酸化炭素などの温室効果ガスの削減だと、はっきりしています。そのため、対策を立てて前に進めばよいのです。ところが不安の場合には、なぜ不安なのか分からないのです。これでは対策を立てようも、対処のしようもありません。何だかわからないが不安で落ちつかない。その結果、勉強も仕事も手につかない、ということになりかねません。

卒業して新しい環境に入る。これまで学んだ「一」は知っていますが、次の段階の「二」はどんなものなのかはわかりません。とりわけ、新しく社会人になる人や転職をする人の不安は大きいでしょう。自分一人ですべていけるだろうか。新しい仕事に馴染めるだろうか。はたして家族を養っていけるだろうかなど、不安の種類には事欠きません。

しかし、そうした不安を先に立てたからといって、何かいいことがあるでしょうか。不安だからといって、万事に消極的になってしまえば、何一つ成就することはできません。もし不幸にして不安の中すれば、ただ落ち込んで、生きる気力も消耗するでしょう。日々、不安に覆われた生活は暗く、不幸を招き寄せることさえあります。

では、希望を先に立てて新しい環境に乗り出したとしたらどうでしょう。こうしたい、あのようになりたい、希望を抱いて精進努力する人は、たとえ目先の希望がかなわなかったとしても、また新たな希望

を見つけて努力するに違いないのです。そうした人生は活気に満ちて楽しいものです。

それはちょうど、将棋や囲碁の盤上の思考に似ています。対戦する両者とも自分が希望する展開になるように駒を進めますが、相手がいる以上、思いどおりになるとはかぎりません。成功もあれば失敗もあります。一手指すごとに無数の展開を検討し、その段階で最善の、次の一手を打つのです。

最初の手（希望）が封じられたからといって、勝負が終わったわけではありません。最終的な希望の実現、すなわち勝負に勝つために、まだまだ無数の手が残されているのです。

人生もまた同じです。昨日の希望が今日ついえたからといって、あなたの人生が終わったわけではないのです。昨日の希望は果たせなかった。では、今日と明日は何を希望するか、というだけのことです。

昨日の失敗の原因を冷静に判断し、最終的な希望の実現のために、より実現可能な今日と明日の希望を設定し、実践すればよいのです。そうしてこそ、私たちは充実した日々を生き貫いていくことができます。

「不安を捨てよ、ただ希望せよ」、先ほど私は、この言葉を卒業生をはじめ人生の岐路にある人たちに贈りたいと申しました。しかし、考えてみると、私たち会友のすべてが卒業生であり、人生の岐路にあるとも言えるのです。

なぜなら、私たちの誰もが昨日「一を知った」卒業生であり、そして今日また「二を知らぬ」卒業生でもあるからです。同じ意味で、人生を真剣に生きる誰もが、今日只今、人生の岐路にあると言ってよいでしょう。

人生の一段が上がって、また次の段を踏んでいない状態。それが今を生きている私たちのありようなのです。年齢も職業も経歴も実績も関係ありません。私たちはみなそれぞれに、昨日までのことを学び終えて、明日からのことは何も知らない状態にあるのです。

明日はどうなるのか。それは誰にもわかりません。新聞やテレビはさまざまに、明日への不安を煽って、

種々の憶測や対策を述べ立てます。しかし、日本経済は破綻するのではないか。私たちの生活は立ち行かなくなるのではないか。人類の未来はないのではないかなどという、漠たる不安が実証されたことがなく、不安に基づく憶測や対策が有効だったためしもありません。

もちろん、地球の温暖化のように、原因がはっきりしている「恐れ」に対しては、断固として、これを排除するように努めなければなりません。

しかし、明日がどうなるか、ただ不安に思ってもいいことは一つもないのです。

最近のサブプライムローン問題に端を発する世界的な経済不安もわかりです。具体的な「恐れ」よりも、漠然とした「不安」の方が先立って、過剰反応の連鎖を引き起し、世界の株価は急落と乱高下を繰り返し、世界経済の先行きを不透明にしています。実態のない不安が逆に実態を作り出してしまっているのです。不安は有害なだけなのです。

だとすれば、明日をより善い日にしようと呼望し、そうなるように努力することです。

希望を持つとは、目標を明確にして実践するということです。私たちは迷うことなく、倫理という、明日をより善い日にするための王道を踏んで、一人ひとりの希望の実現に邁進しましょう。

それこそが、日々を楽しく充実して生きる要諦なのです。

